

地域から野生動物と互惠共存できる未来をつくりたい

榎本 拓司（南丹 Wildlife tours）

□はじめに

2012年にワイルドライフマネジメント(科学的な調査研究に基づき、被害管理、個体数管理、生息地管理の3要素を組み合わせることによって人と野生動物の軋轢を減少させ、共存を図る手法)に出会い、野生動物と人の軋轢問題を知ることになった。以来、ワイルドライフマネジメントの現場の仕事に関わりながら家族3人と猫とともに京都に暮らし、野生動物と人が共存できる地域を実現するために自分ができることは何だろうかと考え、あれこれ悩んだり楽しんだりと試行錯誤しながら活動に取り組んでいる。

活動は、里での被害対策、自然体験活動、森の保全活動の3つを軸にして野生動物と互惠共存できる未来を地域で展開することを目標にしている。

今回は、この3軸についてそれぞれのこれまでの取り組み、これから取り組んでいきたい事について紹介させていただきたいと思う。

□人と野生動物のあつれきが身近にある暮らし

S町にて半農半X的な暮らしを始めたのが2014年。S町は中心地や幹線道路を除けば、民家のすぐ脇に山塊や川が通っており、自然がすぐ近くに感じられる土地や町並みが多い。地域の人が所有する先祖代々からのスギヒノキ林、アカマツコナラ林を構成する森林が多く点在し、里山の景観を形成している。その里山から流れ出る水を利用して多くの人が現在も営農や農的暮らしをしている。柿や栗の木が集落内外のあちこちに植えられており、昭和の頃にはマツタケ、柿、栗などがブランドとされ、町外から買い付けに来るほど繁盛していたという。



民家の裏に里山が広がる



里山から水を取り入れた田んぼが広がる

京都の農村地域で野生動物による被害というとサルとシカによるものが多いのではないかと感じているが、このS町も例に漏れずサルとシカによる農作物被害が起きている。

この地域ではサルに悩まされている方が多いと感じていたので、まずはサルによる被害対策から考えていく事にした。

□里での被害対策

S町で軋轢を起こしているサルはSA群と呼ばれ、京都と隣県をまたいで生活している。暮らし始めた当時、SA群の一部が山塊から少し離れている我が家の屋根を走り回り、民家前の畑作物や軒

先に置いていたタマネギをかじり取る事もあった。ロケット花火をサルめがけて打ち込み、周辺まで追い払い、居住地区から離れた里山まで追い上げていた。

当時、4月から8月終り頃までの閑散期（仕事の薄い時期）は自分の時間が許す限り、地域でサル被害の対策活動することにしていたので、八木アンテナと受信機を使って（周波数は役所を訪問し対策のために使用したい旨を申し出て教えていただいた）、S町内での出没を監視し、出没した群れを人知れず追い払いしたり、農業をしている友人にサルが接近していることを知らせたり、畑で作業する人や集落の方に出会えた時はおじろ柵（おじろ用心棒）の紹介やサルの追い払い方法、誘引物になる果樹の撤去をできる限り伝えるようにしていた。

そうしているうちに、あいつはなんだかサルの事を知っている奴らしいという噂が出たのか別地区の区長からサルの追い払いについて話が聞きたいという依頼を受けたこともあった。また、友人向けにサルの対策講習も行っていた。また、フォロワーはさほど広からなかったが、サルを本来の森の生活に戻そうという標語を掲げて SNS で対策事例を発信していたこともあった。友人の畑にイノシシ柵を設置したり、近所の畑にシカ柵を設置したり、その状況や柵の予算に応じてアドバイスなどもしていた。

地域での集会や寄合があるたびに、効果のある対策方法について話をしていたのだが、ある日懇意にしてくださっている方が「お前の言うとおりにしたらサルが通り過ぎるだけになったわ」とか「追い払いをはじめたぞ」などと声をかけてくれるようになった。地域の人々の団結力や、決めたら動くという実行力は強く、以前から追い払い等はされているが、音による威嚇をしていた状況で、サルに向けて花火を打ち込むとか追跡して追払う事を実践してくださったようだ。



追い上げた山中でネムノキを食べるコザル（左）

エノキの実を食べる MB（下）

道路に出没する SA 群（右）



SNS で発信していた当時の情報の一部

それでも、当時に痛感したことは、おじろ柵などの良い柵を立てるためにはいくらか資金が必要になる事だった。農業を営む自営業者や営農組合なら、予算を立てていくらかは設備に投資ができる。農的暮らしで移住して畑をしたり、代々の土地で家族の野菜を自給している人にとってはやはり防護柵にコストがかかると難色を示す人も多かった。私が個人で、おじろ柵をある程度のm数で一式購入し、高齢者で、かつ被害の大きい菜園等にレンタルする形で支援できないか等を考えたこともあったが、なにぶん自分もお金がないなか無償で活動していたので、それを実行に移すことはできなかった。

もうひとつ痛感したことがある。1人で活動するということの限界である。どの対策資料にも「対策の成功する秘訣は1人ではなく複数人で協力すること」と書かれているので自分自身もそれは分かっていたのだが…。無償なので限られた時間

の中でしか動けない制限もあるが、1人で動いているとつながりや広がりなかなか生まれてこなかった。今思えば、自分自身も人と繋がってもらえるような努力をしてこなかったと思う。

現在は新たに体制を整え、追払い講座や追跡ワークショップを検討している。自分の時間を作って活動するとはいえ、無償で続けることは困難なのでどうにか対策を回せるだけの資金を得ながら、里山暮らしをナリワイ（生業）とする人の助けになりたいと考えている。例えば、補助金や助成金を活用して各種のプログラムを提供したり、被害の激甚なエリアにおいては、サルから完全に守れるモデル畑なども作りたい。

ゆくゆくは3～5集落間に1人は対策の知識を持った人が出てくるイメージで、その人たちと相互につながりながら、里での被害対策を進めていきたいと考えている。

□地域の森林に思う事

森林の現状についてまず話をすると、多くの方が「こんな山持っても何の価値もないわ」と落胆される声を聴く。おじいさんの代から孫のために植えられたという先祖代々の森林を継承してはいるものの、国内の木材価格が低迷し山に人が入らなくなった。放置されてからは手入れもなくこの先どうしていくのいいかもわからないという声も聞く。地域の方が「何の価値もない」と思われる気持ちも理解できるつもりではいるが、私にとって地域の森林は、宝に匹敵する価値があると本気で考えている。

何の価値もないというあきらめが木材資源の観点から始まっているとするなら、森の多様な環境を楽しむ、多様な植物や動物を体験することが価値になることを目指した活動をし、その価値によって森をつくることや保全対策へと循環ができていくような取り組みをしたいと考えている。こうすることで地域の森林に人が関わり、森を利用することがおもしろくなるのではないかと考えた。多様な樹種から構成される森を、体験することや

利用することを楽しみながら森をつくっていく。体験が価値になる多様な森づくりは防災面や環境保全面とも繋がり、それが人だけへの恵みではなく野生動物にとっても環境収容力となる、そのような森へと繋げていきたい。

いつか里での棲み分けがしっかりできた時に備えて、森林が生息地としての機能を高めていることは好ましい状態だと思っている。人も動物も利用できる樹種や、斜面防災機能となる地域性苗木を育成管理し植栽していくとか、多様な森の価値が地域や人への利益を生み、地域の山主さんにも還元できれば地域の森林をよりよい方向に持っていけるかもしれないと考えている。個人活動としての私に広大なスケールは無理かもしれないが、いつか小さな森林からモデルをつくれないうるかと考えている。

ワイルドライフマネジメントとして考えてみると、里での被害対策が進んできたとき、持続可能な共存の未来を考えるなら、避けて通れないのが生息地管理だと思っている。森が価値を生み、野生動物に対する許容環境が整ってくれば、ニホンザルやツキノワグマのように行動範囲の広い動物の生態情報や生息地に関する科学的な情報を、森づくりや保全の情報として組み込めないだろうかと思う。例えばニホンザルの追跡をする中で観察記録してきた採食情報や環境情報を用いて地域の群れの生息地管理（保全）に使うことができないだろうか考えている。

前置きが長くなったが、以上のような事から地域の森林で自分にできることは何かを考えた結果、自然体験活動と森の保全活動にフォーカスして動き出すことにした。

□自然体験活動

この地区の人工林は集落近くを占め、その上部山塊にアカマツとコナラが優占する落葉広葉樹林がある。森林に人が入らなくなったことをどうにかしようという有志が集まり 2018 年に、HUB 里山クラブという自然遊びの会が結成された。山

主さんに許可を得て地域の里山に入らせてもらい、間伐した木を使ってウッドデッキを作り、天体観察、センサーカメラを子どもたちと仕掛けて生息している動物の観察や、スウェーデントーチワークショップ、森の食材を調達しての食事会などを活動メンバーで企画実施した。



HUB 里山クラブの活動風景

山主さんは落葉広葉樹の苗木をコツコツと植栽しており、山のあちこちに手製の金網フェンスでシカ採食から苗木を守っている。そのころから地域の方が管理する森林に連れて行ってもらったり、森に入って活動することを許してもらえるようになった。

有志メンバーと活動を続けるなかで、地域の人の話を聞く中で、地域の森林でさらに自分にできることは何かを考え、子どもたちの未来へより良い自然環境を繋げること、身近な野生動植物を体験する価値をつくり多様性のある森づくりへ繋げる事を理念として掲げ、2021年に南丹 Wildlife tours として新たに活動を開始した。親子で森あそびのワークショップ、身近な野生動物の痕跡さがし、(地域で活動する友人とコラボしての) 森の土を使ったクレヨンづくり、森と動物の環境調査、森のクラフトシロップづくりなど、とにかく思いついたことを企画し実行している。毎回思いつくたびに子どもたちにどう響くのか? 響かないのか? 手探りではあるが自分自身も楽しみながら実施している。



痕跡探し



森のクラフトシロップ



光る木の枝お絵描き

今年は家族参加型の野生動物と地域を知るプログラムを友人と計画している。

□地域で行われている森の活動

2022年、地区では当時の区長と副区長が森林環境を考える会を発足させ、森林の今後について地区民が考えるきっかけとなるような活動を企画実施された。22年度は地区の人工林を考える事をテーマにして森林組合への視察と、木材加工所への視察、トレッキングコースの開拓を実施され、私もそこに参加させていただいた。23年度は、落葉広葉樹林エリアの保全について考える事をテーマに、森林環境を考える会が、野生動物保護管理事務所の箕浦研究員に座学講義と実地講座を依頼した。箕浦さんの講義および実地講座には、地区内の組織の役員と地区の山主さん数名、地域の方が参加され、その関心の高さを示した。



1回目の座学講義風景



2回目の実地講座風景



トレッキングマップ作りの会議風景



地区出身のデザイナーさんが地図デザインを担当

また、22年度に開拓されたトレッキングコースを含めた地域の地図を発行された。

今年は地図づくりから関わってきた有志で「埴生やまびこ」が結成され、私もメンバーとして参加させていただいている。昨年の箕浦さんの実地講座に参加された地域の方がパッチディフェンスに興味を持たれたようで、地域の森林について考える事を目的に、落葉広葉樹林エリアにパッチデ

ィフェンスを設置してシカの採食から植生を保全しようという動きが進んでいる。地域に少しずつシカ管理と森林を考える方が広がっていくといいなと思う。

□森の保全活動

2022年に地域の有志メンバーと森の活動しながら、地域の森林で課題となっている放置された人工林に対して、自分に何かできることは無いだろうかと考えていた。その時に出会ったのが自伐型林業という手法だった。

自伐型林業について自分なりに情報を集め、関西各地で行われている自伐型林業に関するイベントに出かけたり、実際に施業されている現場を拝見したり、関わって活動されている方々の話を聞く度に、私の中でこれを使って地域の森づくりに貢献したいと考えるようになっていった。というわけで、昨年から自伐型林業の研修に参加して現在は道づくりの技術や、林業作業を習得中である。



小さな尾根に道をつけられる



幅2.5m以下の道で木材搬出ができる



広葉樹を刈らずに育成する

さて、自伐型林業とは、採算性と環境保全を高い次元で両立する持続的森林経営のことである（自伐型林業推進協会 HP より抜粋）。

簡単に紹介すると、自伐型林業は、大きな重機や高性能林業機械のような高額な機械を必要とせず、地域の小さな森から誰でも始める事ができる。少人数小規模経営のために採算性が高く、山主への還元率も高いといわれている。特に木材を搬出するための道づくりは、地域の森林に適した工法であり、地形に沿った道をつける技術と、水をコントロールする技術を有している。小さな尾根にもつけられる 2.5m ほどの幅の道で、斜面を切る取る高さは 1.4m ほどしかない。そのため、写真のように木を過度に切らず、木を生かして道を作る事ができる。木を生かすことで木の根が道周りの地盤を強くする。道が森林環境や生物の移動を分断せず、長期の管理を目標とした健全な森づくりができる。この小さな（でも壊れにくい）道を高密度に作ることで、手入れが行き届く。森林を維持するために間伐を森林全体の 2 割にとどめ、周辺の環境を大きく変化させることなく良木を育て、小コストで搬出を可能とする。間伐により成長してきた落葉広葉樹や、すでに森林内に生育している広葉樹にも役割を与えそれらを大切に残し森を育てる事ができる。

自伐型林業の技術を森づくりに使うことで、地域から防災に強い森づくりや、シカによる採食から森林機能を回復させる取り組み等と繋げることができると感じている。将来的には、野生動物や

生き物と共存するための森づくりや生息地管理など、自伐型林業は環境保全のための森づくりと相性がいいのではないだろうかと考えている。全国各地で研修やフォーラムが開催されるなど、自伐型林業は全国各地で関心の高さを見せている。地域に山守や、森林の担い手が増えることで、健全な人工林が増えたり、下層植生の衰退していく自然林も回復のための管理ができるのではないだろうかと感じている。自伐型林業についてはまた別の機会に書く事ができればと思う。

自伐型林業のことを調べ始めてから、つながった人たちと話をしていく中で、昨年には近隣の市町境界を越えた有志が集まり、自伐型林業について情報交換するグループを結成した。メンバーは現在 25 名となり、この取り組みに関する関心の高さが伺える。すでにこのメンバーのなかには自伐型林業を実践している人も数名いる。私にとっては始まったばかりだが、この技術を修得し、地域の森づくりへ繋げていきたい。

今年は森林と地域の関わりについての取り組みが何件か進行していく計画がされている。

自伐型林業が広がり、地域の森林の担い手が増えたり、生息地管理やワイルドライフマネジメントに関わる人材が増えるといいと思う。

□おわりに

野生動物と人との双方について考えた森づくりや、生息地管理についてアドバイスやご意見があればぜひご意見をいただきたい。自分にはわからないことや知らないことを教えてもらうことで、新たな考えが生まれ、それをいろんな方と共有したり実施することで、人と野生動物の共存に貢献していきたい。

これからも地域から野生動物と互恵共存できる未来のために、継続して地域での活動続け、模索しながらではあるが、自分にできることは何か、つながってできることが何かを考え、今後も地道に取り組んでいきたいと考えている。